

# 熊谷市で近年問題となっている 病害虫や雑草



埼玉県大里農林振興センター 技術普及担当  
主任 丹野和幸

# 気象や経営の変化は病害虫・雑草にも影響



温暖化  
(高温やゲリラ豪雨)



経営の大規模化  
(作期や品種の多様化)

問題となる病害虫・  
雑草の変化



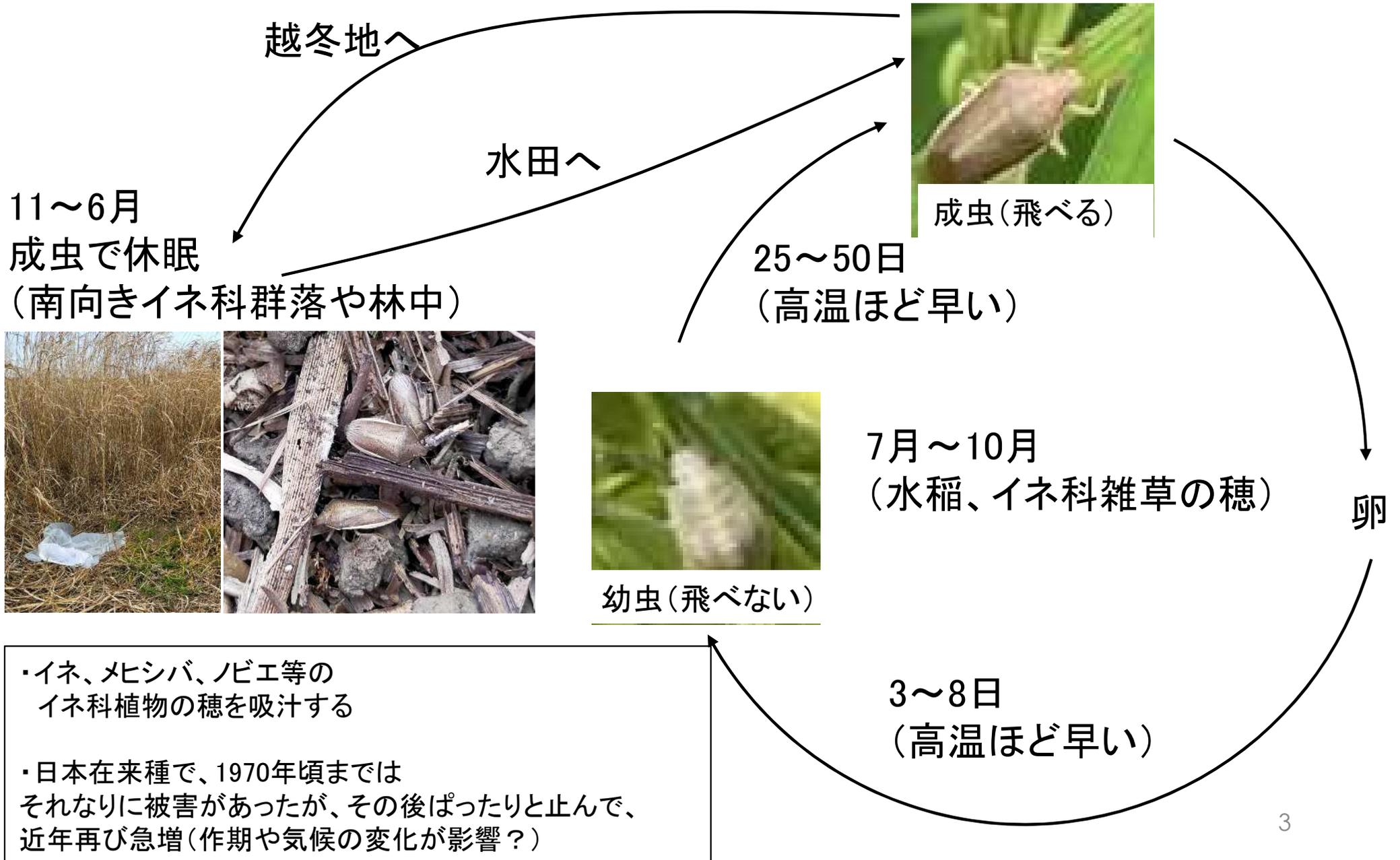
イネカメムシ



高温性病害

雑草

# 例1: イネカメムシ



# イネカメムシの加害時期と被害

- ・出穂後、日が浅いうちに吸汁される

- 不稔(減収)

- ・出穂後登熟し始めてから(10日~2週間以降くらい)で吸汁される

- 斑点米(品質低下)

加害時期によって収量/品質のどちらに影響するかが異なる

世代を経て個体数が増えてくる6月末~7月植の晩生品種で被害大

# イネカメムシの防除

令和6年8月9日版

## イネカメムシを 防除しましょう！！



各地でイネカメムシが発生しています。現在は第1世代虫が主体で、今後9月にかけて次のピークを迎えます。不稔及び斑点米を防ぐためには、出穂期～穂揃期と、その7～10日後の薬剤散布が有効です。適期防除を実施しましょう。



イネカメムシの生育過程

### 1回目防除 不稔の防止・低減

出穂期～穂揃期に必ず薬剤散布を行う。  
粒剤では処理を数日早める。



株内の茎のうち約半数～8割程度が出穂した頃

### 2回目防除 斑点米の防止・低減

穂揃期の7～10日後に薬剤散布を行う。  
粒剤では処理を数日早める。



穂が上部から傾き、籾が厚くなり始めた頃

# イネカメムシの防除

田植時期	品種	1回目防除	2回目防除
5月中下旬	彩のきずな、コシヒカリ (キヌ)	7月下旬～8月上旬	8月中旬～下旬
	彩のかがやき	8月上旬～中旬	8月中旬～下旬
6月上旬	彩のきずな、コシヒカリ (キヌ)	8月上旬	8月中旬～下旬
	彩のかがやき	8月中旬	8月下旬～9月上旬
6月中下旬	彩のきずな (キヌ)	8月中旬～下旬	8月下旬～9月上旬
	彩のかがやき	8月下旬	9月上旬～中旬

## 使用可能な薬剤の例

(令和6年8月1日時点の登録情報)  
 農薬はラベルに記載の適用作物、使用時期、使用方法等を十分確認の上、最終有効期限までに使用してください。

商品名	IRACコード	倍数・処理量	使用時期・回数
スタークル顆粒水溶剤 アルバリン顆粒水溶剤	4A	2,000倍	収穫7日前まで・3回以内*
ダントツ水溶剤	4A	4,000倍	収穫7日前まで・3回以内
スミチオン乳剤	1B	1,000倍	収穫21日前まで・2回以内
スタークル粒剤 アルバリン粒剤	4A	3kg/10a	収穫7日前まで・3回以内*

\* 「スタークル(アルバリン)顆粒水溶剤」「スタークル(アルバリン)粒剤」について、ジメトランの総使用回数は4回以内のため、散布回数に注意する。  
**イネカメムシを含む斑点米カメムシ類の全国的な発生により、薬剤[タイトルなし]ひっ迫しています。記載の薬剤が欠品となっている可能性もありますので、お早めに薬剤販売店に御確認ください。**

本虫に係る相談については、お近くの県農林振興センターか以下のいずれかに御連絡ください。

# イネカメムシの密度を減らすための検討

## 越冬に向かう世代を減らす

- ・水稻栽培終期は晩生の飼料イネやひこばえ、畦畔イネ科雑草に集中

- ・ひこばえの耕うん(特に6月上旬以前の移植日のもの)

- ・飼料米の防除

- ・草刈り

眠  
イネ科群落や林中)



越冬地へ

水田へ

25~50日  
(高温ほど早い)



幼虫(飛べない)

7月~10月  
(水稻、イネ科雑草)

3~8日  
(高温ほど早い)

## 越冬してきた世代を叩く

- ・越冬してきた世代は周辺地域で一番早い出穂期のほ場に集中

- ・あえて出穂期の早い品種のほ場を作り、そこに集めて重点的に防除するというのもあり(地域の理解や協力が必要)



**越冬中や水稻栽培盛期のイネカメムシは分散している。  
一か所に集中する時期を叩けないか今後検証していきたい**

## 例2: 高温性病害



もみ枯細菌病



もみ枯細菌病とごま葉枯病の混発

・令和6年の熊谷市の水稻栽培では、高温多湿で発生する病害が問題となった。

・特に穂枯れを伴うものが被害が大きく、ほ場によってはイネカメムシよりも大きな被害

・8月下旬の降雨が多かったため、この頃に出穂～登熟初期だったものが中心に被害を受けた

# ごま葉枯病ともみ枯細菌病

## ・ごま葉枯病

種子伝染性の糸状菌病で、適温25～30℃

葉や穂に褐色で円形の小斑点が形成され、激発すると穂枯れに至る

育苗期と出穂～10日後頃の高湿多湿で発生が助長

施肥が少ない、または鉄やマンガンの少ない老朽化水田で多発

## ・もみ枯細菌病

種子伝染性の細菌病で、最適温度30～35℃

育苗期の腐敗および穂が褐変して不稔となり直立する症状を引き起こす

特に催芽温度が30～32℃程度の高湿だと育苗期に多発し、蔓延につながる

育苗期と出穂～10日後頃の高湿多湿で発生が助長

# 高温性病害への対策

## 農閑期(12~3月)

- ・マンガン豊富に含む資材(マンキチ30号など)を40kg/10a程度施用後耕起(ごま葉)

## 種子消毒(4~5月)

- ・温湯消毒の効果が低い場合、テクリードC等で種子消毒(ごま葉、もみ枯細菌)
- ・浸種、催芽、育苗温度は30℃以下、多かん水を避ける(もみ枯細菌)

## 箱剤(5~6月)

- ・糸状菌・細菌病両方に効く抵抗性誘導機能を持つ剤の施用(Dr. オリゼリディア箱粒剤等)(ごま葉、もみ枯細菌)

## 水管理(6~9月)

- ・中干し励行。中干し前でもガスが多い時は1~3日落水し、再入水(還元害対策にもなる。除草剤施用後間もない場合は落水せず、施用1週間後以降に落水)(ごま葉)

## 本田防除(8月)

- ・ブラシンフロアブル(糸状菌、細菌病両方に効果あり)の施用(ごま葉、もみ枯細菌)<sup>10)</sup>

# 例3：大規模化で顕在化した雑草害



イヌビエ（落水で出芽）



タイヌビエ（湛水でも出芽）



アゼガヤ（落水で出芽）



クサネム（落水で出芽）

- ・熊谷市内では、落水条件下で出芽するイヌビエ、アゼガヤ、クサネムなどが多発傾向

- ・除草剤処理後に落水してしまった場合や、代かきムラで高くなった箇所に出てくる

- ・経営大規模化により管理が粗くなってきている？

# 農閑期の対策：埋土種子量を減らす

- ・「雑草の埋土種子量が増えていく = ほ場の負債が貯まっていく」と考える  
(雑草の増殖率を1倍未満に抑えないと、年々発生量は増加していく)
- ・ほ場表面に落ちているノビエ、アゼガヤ等の種子  
→収穫後耕起前にプリグロックスLを散布すると、一年生雑草は発芽後まもなく枯死
- ・クログワイ等の多年生雑草  
→水稻収穫時に高刈りし、再生した所にラウンドアップを散布すると塊茎を枯らせる
- ・休眠している雑草種子  
→石灰窒素を10a当たり50kg程度施用すると雑草種子の休眠が解けて一斉に発芽してくるため、施用後1か月ほどしたら花が咲く前に耕起して減らす  
(石灰窒素を施用した場合は、基肥を減らす、もしくは省略可能)

# 除草剤施用の省力化と剤選択

・水管理を徹底しないと、田植え同時処理1回では厳しい

(落水条件で出やすい雑草が市内で増えていることが水管理の徹底が難しくなってきたことを物語っている)

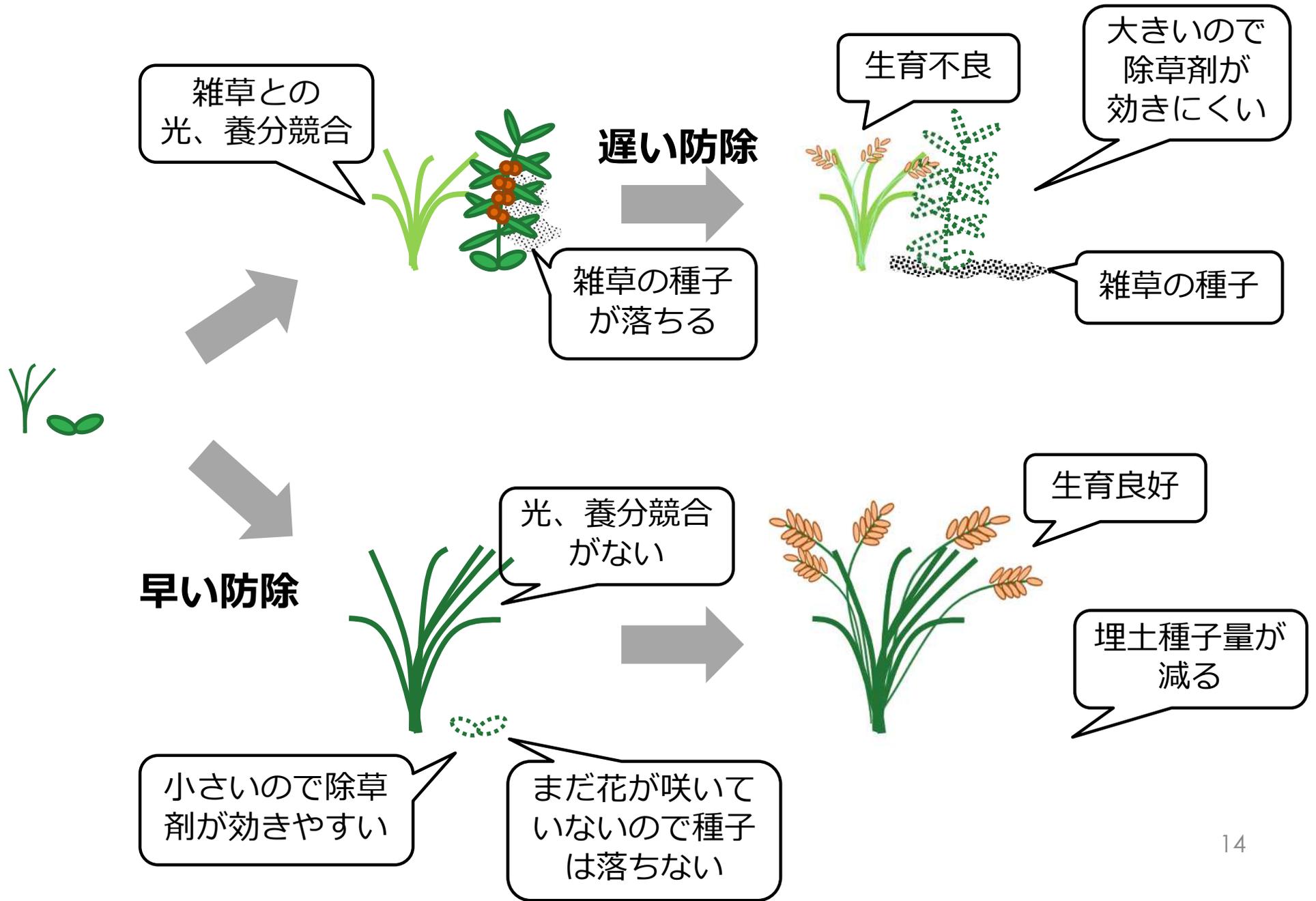
・移植後30日頃までに2回散布

→「田植え同時＋中後期剤」が普通だが、この時期は忙しく散布が遅れがち。「代かき同時＋田植え同時」の2回処理体系の導入も要検討。例えば、滴下装置を用いれば代かき同時で「デルカット乳剤」を施用可能。

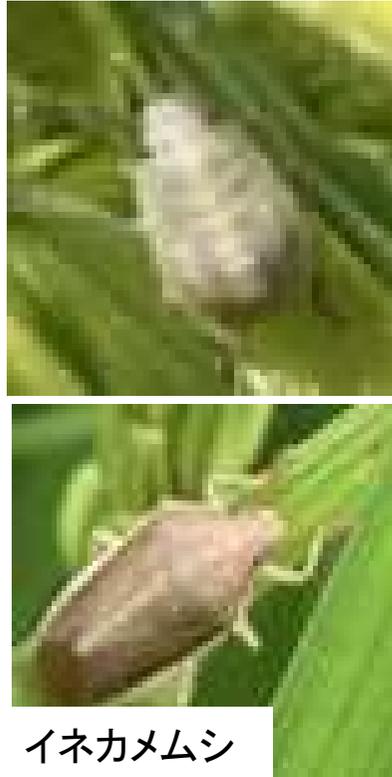
・残効の長い成分を含む剤を推奨

→特に、「代かき同時＋田植え同時」の2回処理の場合、残効が長い必要があるので、このときの田植え同時処理剤としては、落水に強いトリアファモンという有効成分を含むボデーガード1kg粒剤やプライオリティ1kg粒剤、イザナギ1kg粒剤等を推奨。

# 雑草は小さいうちに叩く



# まとめ



イネカメムシ



高温性病害



雑草

## 対策

### ほ場の防除

- ・出穂期～穂揃期、穂揃7～10日後頃の2回防除(晩生水稲は特に注意)
- ・草刈り(出穂前後2週間は控える)

### 地域の密度低減

- ・ひこばえの早期耕うん
- ・飼料米の防除
- ・出穂期の早いほ場の重点防除

- ・マンガン資材施用後
- ・種子消毒
- ・浸種、催芽、育苗温度は30℃以下
- ・多かん水を避ける
- ・糸状菌・細菌病両方に効く抵抗性誘導機能を持つ箱剤の施用
- ・還元害対策
- ・ブラシフロアブルの本田施用

- ・農閑期の除草剤施用
- ・石灰窒素施用(1か月程度後耕起)
- ・除草剤2回散布(田植え同時+中後期もしくは代かき同時+田植え同時)
- ・残効の長い剤の施用
- ・小さいうちの防除徹底